

住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けた見守り活動における ジレンマと方略に関する記述的研究

マスタ ユヅリ * タダカ エツコ ダイ ユカ
 舛田ゆづり* 田高悦子* 臺有桂*
 イトイ ワカ タグチ リエ カワハラ チエ
 糸井和佳* 田口理恵* 河原智江*

目的 近年、高齢者の孤立死が都市部を中心に社会問題となっている。この問題に対し、地域の見守り活動を推進していくことは喫緊の課題であるが、見守り活動を担う住民組織が直面する課題や方策に焦点化して明らかにしたものは見当たらない。本研究では、今後の都市部における孤立死予防に向けた地域見守り活動推進における住民組織が有しているジレンマならびにそれらに対処する方略を住民組織の立場から明らかにし、今後の実践の示唆を得ることを目的とした。

方法 対象は、A市b区c地区(中学校区)で見守り活動の実績のある住民組織の代表14人である。研究デザインは、質的帰納的研究である。データ収集は、フォーカスグループインタビュー法(FGI)を用い、テーマは、住民組織が地域の見守り活動を進めていく上で感じている困難や課題等とし、計3回実施した。データ分析は、FGIの逐語録から単独で意味の理解が可能な最小単位の単語や文章をコードとして抽出し、次いでコードの類似性を勘案してサブカテゴリとし、さらにサブカテゴリを抽象化してカテゴリとした。

結果 住民組織における見守り活動の推進に向けた課題と取組みは個人、近隣、地域の3領域に抽象化された。まず、ジレンマについては【見守りの拒否や無関心】、【若年層での孤立や閉じこもり】、【家族が見守りをしない】、【近隣住民の関係性の希薄】、【新旧住民がつながりにくい】、【近所付き合いへの負担感】、【プライバシー意識の高まりによる情報共有の困難】、【見守りの担い手や集う場の資源不足】の各カテゴリーが抽出された。また、方略については【地域の中で1対1の関係をつくる】、【地域の集まりや輪へ引き込む】、【さりげない日々の安否確認を行う】、【助けが必要な人の存在を知らせる】、【生活の中で互いに知り合う仕掛けをする】、【近隣単位の小さな見守りのシステムをつくる】、【行政と住民組織が連携し地区組織を活かす】、【地域住民の信頼感やつながりを育む】が抽出された。

結論 地域の見守り活動の推進に向けては、各住民組織が互いの活動や存在についてより理解を深めるとともに、連携が推進されるような機会の開催や場(ネットワーク)の整え、あるいはそのような風土を地域につくっていくための検討が必要である。

Key words : 地域, 地区組織活動, 高齢者, ネットワーク, 見守り, 孤立

I 緒 言

わが国では、急速な少子高齢化と核家族化の進行等により、高齢者の単独世帯、いわゆる独居高齢者が増加の一途をたどっている。その数(割合)は、1989年度の159万世帯(65歳以上の者のいる世帯数に占める割合14.8%)から、2009年度は463万世帯

(同割合23.0%)となった¹⁾。この傾向は、今後、とくに都市部において、高度成長期に流入した団塊の世代の高齢化に伴い、全国平均に比して急増することが予測されている²⁾。

調査³⁾によれば、独居高齢者は、夫婦のみの世帯や一般世帯に比べ、近所づきあいの割合が低く、近隣の地域住民や友人との“つきあいがいい”者が1割程度存在している。これを都市規模別でみると、相互に訪問できる関係にある人は、大都市において23.4%、町村では45.3%となっており、約2倍の差が開く。都市部は、町村に比べて生活産業や情報産

* 横浜市立大学大学院医学研究科看護学専攻地域看護学領域
 連絡先：〒236-0004 横浜市金沢区福浦3-9
 舛田ゆづり

業、交通インフラが整備されており、地域において他人との関わりを持たない生活が、十分に可能な環境となっていることも背景にはあると考えられる。和久井ら⁴⁾は、大都市部の独居高齢者の抑うつは、他地域、他世帯類型に比して高く、その割合は43.6%に上ることを報告し、その背景として大都市部における人間関係の希薄さが引き起こす孤立があることを示唆している。

このような中で、近年、地域から孤立し、誰にも看取られずに死亡したり、死亡後何日も周囲から気づかれずに放置されたりする高齢者の孤立死が都市部を中心に社会問題として顕在化してきている。孤立死に関する先行研究は、高齢者全般への孤立死予防に向けた包括的対策の必要性を指摘しているが⁵⁾、焦眉の課題は、独居高齢者や高齢者のみ世帯等の孤立死である。独居高齢者の孤立死は、他の世帯類型の孤立死に比して病死かつ自宅での発見が多く、死亡後、長期間発見されない傾向⁵⁾にあることが知られている。孤立死に至る要因の1つとして、生前の社会とのつながりや周囲との人間関係が極めて希薄であった可能性が指摘されているが⁶⁾、独居男性高齢者についてみれば、セルフケアに課題を有しつつ、かつ健康や孤立死の不安を有しながら生活している状況があること⁷⁾も報告されてきている。

このような独居高齢者等をはじめとする高齢者の地域における孤立、孤立死の予防に向けた保健活動の一環として、今日の地域では見守り活動が取り組まれてきている^{8~10)}。孤立死の最大の要因となる社会的孤立が人々の不健康や死亡につながり、他方、社会的支援が人々の健康に有益であることはすでに多くの研究^{11~14)}で実証されているが、見守り活動による支援もまた、高齢者の孤立死を予防する社会的支援として、高齢者自身の健康や安寧を護り、また、高齢者が質の高い生活を送ることのできる基盤としての地域づくりの観点から意義が大きい。

見守り活動における実践は多様であるが、地域における巡回・訪問などによる声かけ・見守り活動は、広く展開されている。また、見守り基準の検討や効果的な見守り方法の検証もされつつある。その結果、見守り活動を通して、支援が必要な者を早期に発見し、援助につながったなど、一定の効果も示されてきている¹⁵⁾。また、見守り活動に関する調査研究^{15~16)}も散見され始めている。しかしながら、この見守り活動を担い推進する主体である、自治会や民生委員らの住民組織が直面する見守り活動の課題や困難さ、今後の推進に向けた取組みを明らかにした報告はまだ十分とは言えない。

地域における孤立や孤立死の予防は、そのリスク

を抱える高齢者等の、当事者のみの努力では解決に向かうことが困難な課題であり、見守り活動は、地域全体の課題として取り組んでいくことが不可欠の活動である。しかしながら、今後、人間関係の希薄さや独自の風土等により、地域全体の課題として取り組むには、さまざまな困難な状況性もあると思われる都市部において、見守り活動を担う住民組織が直面する課題や方策に焦点化して明らかにしたものは見当たらない。以上より、本研究では、今後の都市部における孤立死予防に向けた地域見守り活動において、住民組織が有しているジレンマならびにそれらに対処する方略を住民組織の立場から質的帰納的に明らかにするとともに、今後の実践の示唆を得ることを目的とした。

II 方 法

1. 研究対象 (表1)

研究協力者は、A市b区c地区(中学校区)において、日頃から地域住民や地域に対する見守り活動を含んだ住民自治活動について一定の実績を有する住民組織であり、地域や地域住民の課題に精通し、かつ本研究課題についても十分な経験と見識を有する者として、本研究班からの依頼に応じて、各住民組織から選出され、自由意志により参加することに同意した各組織の代表者、計9組織14人である。なお、c地区の地縁組織の状況は、組織の趣旨に応じて子育てサークル、高齢者支援グループ、障害児者支援グループ、ボランティアグループ、健康づくりグループなどがそれぞれ1~3つあり、地域で自主的な活動を行っている。

2. 対象地域

A市b区c地区は、政令指定都市の1中学校区であり、2010年の時点では、人口11,714人、年少人口割合12.1%、生産年齢人口割合66.5%、老年人口割合21.5%であり¹⁷⁾、老年人口割合は、2000年の16.5%から急速に上昇している。b区全体は、住宅と中小の商業、工業が混在し、銭湯や小売りの商店街といった下町情緒のある人情味豊かな町としても発展してきた。一戸建ての多い住宅地であるが、大規模集合住宅も混在する。公共交通機関の便は良好で、A市中心部までの所要時間は約15分程度である。自治会加入率は、A市全体で78.4%、b区全体で80%以上90%未満であるが、加入率は年々減少傾向にある。

3. 研究デザイン

研究デザインは、個々の具体的な事例から、一般に通用するような原理・法則を導き出す帰納的な方法である質的帰納的研究である。データ収集は、当

表1 調査対象者の概要と各団体の見守り活動

n = 14

所 属	役 職	人数	見守り活動に関する活動の趣旨
地区社協	会長	1人	声かけ・見守り訪問活動
	副会長	2人	高齢者会食会
	事務局長	1人	高齢者への配食活動
地区連合町内会	会長	1人	町内会の区域を越えた広域的な取り組み (見守り活動等)の推進
	副会長	1人	
	防犯部長	1人	
民生委員	副会長	1人	個別訪問・見守り
保健活動推進員	会長	1人	地域での健康づくり活動 健康づくり情報の地域への提供
友愛活動推進員	代表	1人	地区の老人会と連携して見守り活動
地区老連	会長	1人	地域活動としての健康づくり, 見守り活動
青少年指導員	地区代表	1人	青少年に関する相談と愛護活動 青少年育成に係る地域活動の推進
チーム防災	代表	1人	19自治会町内科医の防災部長および家庭防災員を中心に約50人で結成し, 見守りを含む防災活動を地域住民主体で運営
おしゃべり会	会長	1人	集いの開催による見守り・高齢者支援

事者の「生の声そのままの情報」を幅広く、深く得ることのできるフォーカス・グループ・インタビュー法¹⁸⁾(以下、FGI)とした。FGIは、住民組織の代表を2グループに編成し、各グループにつきA市の保健福祉行政職2人のファシリテーターならびに若干名のコ・ファシリテーターにより展開された。研究者は、FGIの計画ならびに総括(データ収集、分析)を行う者として位置づけ、よって、当該FGIには構成員としては参加せず、客観的に参加者の様子等を参与観察した。インタビューは1回60~90分とし、2009年10月より2010年3月まで計3回、地区会館で実施された。

1) データ収集

本研究のリサーチクエスションは、「都市部における孤立死予防に向けた地域の見守り活動推進における住民組織のジレンマとは何か、また、今後どのような方略が取りうるか」である。データ収集は、この問いに基づき、FGIにおいて研究者が作成したオリジナルのインタビューガイドを用いて行った。具体的には「見守り活動の中で体験した困った事柄・難しい事例について」、「見守り活動の中での活動組織や団体における困りごとや懸念している事柄について」、「地域と行政・関連機関との見守り活動に必要なことについて」、「今後の展望」などの内容である。すべてのFGIについて録音した。対象者の属性については質問紙調査(無記名自記式)に

て把握した。

2) データ分析

FGIで得られたすべての情報について逐語録に起こし、精読した上で、研究目的に照らし合わせて意味が読み取れる最小単位の言葉や文章を「コード」とした。コード化する際には、参与観察記録とも照らし合わせ、文脈の理解をより高めた。共通の意味内容をもつコードを集約し、「サブカテゴリー」を形成した。さらに、サブカテゴリー間の意味内容や関係を考慮しながらインタビュー全体での文脈の意味を検討し、最終的に「カテゴリー」を作成した。なお、カテゴリーの属性を考慮し、個人、近隣、地域に属するものにそれぞれ分類を行った。データ分析過程ではすべてのFGI対象者に対し、分析結果をフィードバックし、データの解釈がインタビューに基づき妥当であるか否か、また、その結果に関して同意するか否かについて確認の手続きを実施した。

4. 倫理的配慮

対象者に対して、研究者より調査研究への協力の要請を行った。研究への参加は任意であり、拒否しても何ら不利益が生じないこと等について文書により説明を行い、内容を了解した上で参加した。また、FGIにおけるICレコーダーを用いた録音の目的、方法ならびに倫理的配慮(個人情報取り扱いには十分注意すること等)について、事前に書面を用い

て研究者より説明し、承諾を得た上で実施した。なお、本研究は横浜市立大学倫理審査会の承認を得た。(承認年月日：2009年9月7日，受付番号：0907-063264)

Ⅲ 結 果

1. 調査対象者の概要 (表1)

対象者の基本属性は男性8人，女性6人であり，各々の所属と役職ならびに実施している見守り活動の内容は表1の如くであった。なお，FGIに参加した住民組織の代表の平均年齢は67.8±6.9歳，A市b区c地区での平均居住年数は36.2±11.1年，見守り活動年数の平均年数は8.8±2.9年であった。

2. 見守り活動の推進に向けたジレンマと方略について

見守り活動の推進に向けたジレンマと方略は，見守り支援の対象者個人に関するもの(「個人」)，時間や場所を共有している近隣関係や，集団に関するもの(「近隣」)，個人や集団を取り巻く人や地区組織などを含めた環境や制度に関するもの(「地域」)の各領域に類別された。この3つの分類は，明確には分離せず，重なり合ったり，互いに影響したりする部分もあると考えられたが，より実践に役立てるため最も関連の濃い分類に整理した。各々の領域におけるカテゴリ，サブカテゴリの内容については表2，表3，表4に示す。以下，カテゴリは【】，サブカテゴリは〈〉を用い，また，表には示していないが，コードは「」を用いて説明する。

1) 個人におけるジレンマと方略 (表2)

ジレンマとして，【見守りの拒否や無関心】のカテゴリが抽出された。これは，サブカテゴリに〈他人や公のお世話を望まない，もしくは拒否する

る〉，および〈地域や近隣との関わりに関心がない，もしくは閉じこもっている〉を有し，これには，「人の仲間に入りたくない思いがある」，「見守りを受けることに負い目がある」，「地域の中には人嫌いな方もいて，集まりなどの声かけをまったく無視する」といったコードが含まれた。【若年層での孤立や閉じこもり】のカテゴリでは，サブカテゴリとして，〈若年のニートなど見守りの対象予備群が存在する〉，〈若年層の閉じこもりは，表へ問題が出にくく，把握しにくい〉がみられた。ここでは，「見守っていかなくてはならないのは，高齢者だけではなくニートなどもある」，「家に閉じこもっている方がいる」などのコードがみられ，地域から孤立し，多様な見守りのニーズをもつ対象者の存在が示唆された。【家族が見守りをしない】のカテゴリでは，〈高齢者等の健康問題を，家族が支援しない〉，〈普段からの家族間のつながりや機能が貧弱である〉がみられた。見守りの対象者に家族がいても，見守りの機能や役割を果たせず，住民組織の見守り支援者がジレンマを抱えながら見守り支援を行っていることが示唆された。

一方，今後の方略としては，【地域の中で1対1の関係をつくる】のカテゴリが抽出され，サブカテゴリとして，〈見守りの対象者が個人的に心を許すようなつながりをつくる〉などがみられた。これには，「食事会に来られなくなった人には配食をして，伺った時に情報交換や話をする」，「関わりを避ける人に対しても，根気強く関わる」などのコードが含まれた。また【地域の集まりや輪へ引き込む】のカテゴリでは，〈見守りの対象者に声をかけて地域の集まりへの参加を誘う〉，〈見守りの対象者やその家族にも声かけをして顔見知りになる〉のサブカテゴリがみられ，同サブカテゴリでは，「道

表2 住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けた見守り活動 —個人—

ジレンマ	方略
【見守りの拒否や無関心】	【地域の中で1対1の関係をつくる】
他人や公のお世話を望まない，もしくは拒否する	見守りの対象者が個人的に心を許すようなつながりをつくる
地域や近隣との関わりに関心がない，もしくは閉じこもっている	見守りの対象者が自ら支援の求めを発信できるよう働きかける
【若年層での孤立や閉じこもり】	【地域の集まりや輪へ引き込む】
若年のニートなど見守りの対象予備群が存在する	見守りの対象者に声をかけて地域の集まりへの参加を誘う
若年層の閉じこもりは，表へ問題が出にくく，把握しにくい	見守りの対象者やその家族にも声かけをして顔見知りになる
【家族が見守りをしない】	【さりげない日々の安否確認を行う】
高齢者等の健康問題を，家族が支援しない	見守りの対象者が重荷にならないように安否確認をする
普段からの家族間のつながりや機能が貧弱である	夜に電気がつくか，朝に両戸が開くか日々の気配を確認する

端や近所で会うたびにあいさつや声かけをし、話を
する」、「家族の人へも気遣いの声をかける」とい
ったコードが含まれた。さらに【さりげない日々の安
否確認を行う】の 카테고리では、〈見守りの対象
者が重荷にならないように安否確認をする〉、〈夜に
電気がつくか、朝に雨戸が開くか日々の気配を確認
する〉といったサブカテゴリーが抽出された。

2) 近隣におけるジレンマと方略(表3)

ジレンマとして、まず【近隣住民の関係性の希薄】
の 카테고리が抽出された。これには、〈隣近
所での関係性や付き合いが希薄である〉、および
〈近隣に住んでいる人の名前や暮らしが互いに分か
らない〉といったサブカテゴリーがあり、これに
は、「アパートに住んでいる人の状況がわからない」、
「隣近所の人との関係性がないとコミュニケーション
をとれない」といったコードがみられた。また、
【転入者と地域住民がつながりにくい】という
カテゴリーでは、〈古くから地域に居住する住民層
と、転入者がつながりにくい〉というサブカテゴ
リーがみられ、これには、「後期高齢者が知らない
間に担当地区のアパートに引越しても民生委員に情
報をもらえない」、「転入者について情報がない」な
どのコードがあった。【近所付き合いへの負担感】
の 카테고리では、〈高齢者等への見守りに対する
近隣住民の不安がある〉、〈近隣で関係づくりをす
ることへの遠慮や負担感がある〉といったサブカテゴ
リーがみられた。

一方、今後の方略としては、【助けが必要な人の
存在を知らせる】の 카테고리が抽出された。これ
には、〈他の人の支えが必要な近隣住民がいること
を伝える〉などのサブカテゴリーがみられ、これに
は、「近所の人々の状況に合わせて見守りをお願いす
る」、「見守り対象の人と近所の人々がコミュニケーシ

ョンをとれるようにする」といった、関係づくりの
促しを示唆するコードがみられた。また、【生活の
中で互いに知り合う仕掛けをする】というカテゴ
リーでは、〈向こう3軒両隣でのつながりをつく
り、生活の様子を知り合う〉、〈防災や防犯を糸口に
近隣での平時の関係性をつくる〉というサブカテゴ
リーがみられた。これには、「向こう3軒両隣での
狭い範囲でのつながりが、見守りや防災の原点にな
る」というコードがあった。さらに【近隣単位の小
さな見守りのシステムをつくる】の 카테고리で
は、〈地域のインフォーマルな集いや行事を見守る
場として活用する〉、〈近隣住民と民生委員が小さな
ネットワークをつくって見守る〉というサブカテゴ
リーがみられた。「見守りは杓子定規ではだめで、
地域の人の状況に合わせて負担すること、担当す
ることを決める」、「近所の人と関係を作って、見守
りをお願いする」などのコードがあった。日常の生活
の営みを、関係作りのきっかけや、見守りに活用し
ている工夫が示唆された。

3) 地域におけるジレンマと方略(表4)

ジレンマでは、まず【プライバシー意識の高まり
による情報共有の困難】の 카테고리が抽出され
た。これには、〈住民のプライバシー意識が高く、
情報が入手できない〉などが含まれ、同サブカテゴ
リーでは、「自治会や町内会に、高齢者に関する情
報がなかなか入ってこない」、「後期高齢者に関
する情報が入手できない」、「アパートだと表札が
なく、地域の現状がわからない」など、見守り活
動において必要な、現状を把握するための情報が
不足していることを示唆するコードがみられた。他
のサブカテゴリーでは、〈見守りを担う住民組織
間に壁があり連携が上手く進まない〉、〈見守り
をするべき対象者の所在や状況がわからない〉が
みられた。また、

表3 住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けた見守り活動 —近隣—

ジレンマ	方略
【近隣住民の関係性の希薄】	【助けが必要な人の存在を知らせる】
隣近所での関係性や付き合いが希薄である	他の人の支えが必要な近隣住民がいることを伝える
近隣に住んでいる人の名前や暮らしが互いに分からない	近隣の住民同士の日頃の気遣いや助け合いを高める
【新旧住民がつながりにくい】	【生活の中で互いに知り合う仕掛けをする】
古くから居住する住民層と転入者がつながりにくい	向こう3軒両隣でのつながりをつくり、生活の様子を知り合う
知らない間に転居している住民がいる	防災や防犯を糸口に近隣での平時の関係性をつくる
【近所付き合いへの負担感】	【近隣単位の小さな見守りのシステムをつくる】
高齢者等への見守りに対する近隣住民の不安がある	近隣住民と民生委員が小さな繋がりをつくって見守る
近隣で関係づくりをすることへの遠慮や負担感がある	地区の行事やインフォーマルな集いを見守る場として活用する

表4 住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けた見守り活動 —地域—

ジ レ ン マ	方 略
【プライバシー意識の高まりによる情報共有の困難】	【行政と住民組織が連携し地区組織を活かす】
住民のプライバシー意識が高く、情報が入手できない	地域の住民同士が互いに知り合う仕掛けをする
見守りを担う住民組織間に壁があり連携が上手く進まない	対応困難な対象者に住民組織と行政が連携してあたる
見守りをすべき対象者の所在や状況がわからない	住民組織が互いに連携して見守りのネットワークをつくる
【見守りの担い手や集う場の資源不足】	【地域住民の信頼感やつながりを育む】
さまざまな年代の地域住民が気楽に集える場所が少ない	地域で誰でも参加できる場や風土をつくる
見守りを推進する担い手や支え手、後継者が乏しい	地域における高齢者の出番や楽しみの場をつくる
	朝昼晩の挨拶の一言運動を地域に拡げる

【見守りの担い手や集う場の資源不足】というカテゴリーでは、〈さまざまな年代の地域住民が気楽に集える場所が少ない〉、〈見守りを推進する担い手や支え手、後継者が乏しい〉のサブカテゴリーがあった。これには、「見守りの対象が増えることによって、訪問できる頻度も低下する」といったコードがみられた。

一方、今後の方略としては、【行政と住民組織が連携し地区組織を活かす】というカテゴリーが抽出された。これには、〈対応困難な見守りの対象者に住民組織と行政が連携であたる〉というサブカテゴリーがみられ、これには「対応困難な対象者には、自治会長や役所と相談して、公にすることが必要」といったコードが含まれた。また〈住民組織間が連携して見守りのシステムをつくる〉というサブカテゴリーには、「見守り活動に自治会が連携して関わっていきける仕組みをつくる」、「民生委員としてやっている沢山の活動を老人クラブとも防災とももっと組んで実りあるものにしてネットワークを作る」といったコードがみられた。また、【地域住民の信頼感やつながりを育む】のカテゴリーでは、〈地域で誰でも参加できる場や風土をつくる〉、〈地域における高齢者の出番や楽しみの場をつくる〉のサブカテゴリーがみられ、これらには「食事会、おしゃべり会など地域の活動が生きがいにつながっている」、「地域の活動に出席するために元気になろうという人もいる」といったコードがみられた。

Ⅳ 考 察

本研究は、地域の見守り活動に携わる住民組織を対象にFGIを行い、住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けた地域見守り活動推進におけるジレンマを明らかにし、また、その方略をとおして今後の活動の推進に向けた実践の示唆を得ることを目的

としたものである。調査の結果、見守り活動の推進に向けたジレンマとその方略については、個人、近隣、地域の観点から各要素が明らかになった。

第一に、個人では、見守り支援を拒否し、人との関わりを拒絶する地域から孤立した状態像があげられた。高齢者における閉じこもりの予測因子は、友人・近隣・親族との交流頻度が少ないこと、つまり人からの孤立状態にあることがすでに知られている¹⁹⁾。すなわち、そのような人との関わりを拒絶する状態像は、閉じこもりや寝たきりなどの健康問題や生活機能の低下の観点のみならず、孤立死の予防の観点からも捉えることが重要である。このジレンマに対する方略については、対象者と個と個における関係やつながりをつくること、すなわち見守る-見守られるというだけでなく、信頼感に基づいて相互の助け合いができるような住民同士の関係性を築く必要性も示唆された。また、見守り対象者の持つ課題が複雑で対応困難な場合には、見守り支援を担う住民組織や個人に過度の負担とならないよう保健師を含む行政専門職と連携してあたるほか、支援のスキルを共有していく必要性も示唆された。他方、ニーズを有する当事者自らが自治会や見守り組織に支援を求め、発信するとともに、そうしたニーズを有する者が自ら発信することの価値を地域で共通認識することの必要性も示唆された。自治会等の集まりの際に見守りの支援は受ける個人だけでなく、地域住民全体にとっても重要であることを共有化すること等がその一例となろう。一方で、必要な人々がニーズを発信できない、もしくはニーズを認識できていないということも考えられる。そのため、身近な地域で、このような人々を早期に見出すとともに、支援のニーズを顕在化し、支援につなげるしくみが今後必要であろう。

第二に、近隣では、近隣住民の関係性の希薄が示

された。一般に都市部では住民の転出入者が多く、またその世帯は核家族化が進み、一人暮らし世帯が増加している。古くから居住する住民層と転入者のつながりは乏しく、とくに転入高齢者の場合には、転入者を阻む地域や組織が有る場合があることがすでに報告されている²⁰⁾。このジレンマに対する対処については、まずは近隣の単位における住民間のネットワークを形成し、助け合いを進めることが、実現可能な効率的かつ効果的な見守りにつながると考えられる。とくに、向こう3軒両隣という小さな単位での平時のつながりは、近隣と近隣とのつながりを通してやがて地域全体での人とのつながりや信頼感を高め、さらには、災害時など有事の際の迅速な対応をも可能とする地域の基盤を成すと考えられる。すでにソーシャルキャピタルの高い地域では、人々の主観的健康観は高く、死亡率も低いことが報告²¹⁾されている。すなわち今後は、見守りの必要となる対象者のみならず、見守りの担い手にも益するソーシャルキャピタルの観点からも活動を捉え、地域に啓発していく必要がある。

第三に、地域では、地区組織間の連携や横のつながりが弱いことによる活動の困難さや資源の不足があり、特に見守りの担い手や支え手が十分育成されておらず、後継者不足に課題があることが示された。また、住民のプライバシー意識が高いことが、地域のつながりを強めようと無報酬で涙ぐましい努力をしている住民組織に立ちはだかっていることも示された。プライバシーは保護されるべき人権である。しかしながら同時にまた、都市部ではとくに、人と人とのつながりを遮断するものにもなっている。見守りに携わる各地区組織がそれぞれの立場から対象にアプローチするのみでは、今後、増加が推測される見守りの必要な対象者数に対し、もはや限界があることは明白である。地区組織間の連携をいっそう維持・発展していくこと、また、見守りの対象者における情報についても、一定の基準のもとに情報を共有し、適切に使用することを前提にした連携や地域におけるシステムが必要である。

地域変革に向けた住民組織化のプロセスにおいては言うまでもなく、保健師を含めた保健福祉行政職らは、地域住民と協働（パートナーシップ）していくことが重要である²²⁾。すなわち、保健師等専門職が見守り活動を担う住民組織と協働して今後の取り組みを進めていくことは必然であり、今後は、本研究で明らかになった結果を踏まえ、各住民組織が互いの活動や存在についてより理解を深め、連携がより推進されるような機会の開催や場（ネットワーク）の整え、あるいはそのような風土を地域につ

くっていくことが重要である。

本研究の限界は、1 地方都市部の区における住民組織を対象にある一時点において把握されたものであることであり、結果の一般化については注意を要する。今後は、対象者や地域を拡大し、経年的にも検討していくことが必要である。しかしながら本研究は、地域の見守り活動に携わる住民組織のジレンマと方略について、「個人」、「近隣」、「地域」という多次元から支援のあり方を示唆したものである。地域の保健活動においては、個人に向けた支援を通して、集団、あるいは地域全体の問題解決能力を向上することを意図し、一方で、地域のもつ強みや潜在する能力を引き出し、個人の健康課題の解決に向かうよう働きかける。このため、多次元から支援のあり方を示唆した本研究からの知見には一定の意義があると考えられる。

V 結 論

住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けたジレンマと方略について明らかにするため、見守り活動を担う住民組織を対象に FGI を実施した結果、「個人」、「近隣」、「地域」の観点から各々の要素が明らかにされた。まず、ジレンマについては【見守りの拒否や無関心】、【若年層での孤立や閉じこもり】、【家族が見守りをしない】、【近隣住民の関係性の希薄】、【新旧住民がつながりにくい】、【近所付き合いへの負担感】、【プライバシー意識の高まりによる情報共有の困難】、【見守りの担い手や集う場の資源不足】の各カテゴリーが抽出された。また、方略については【地域の中で1対1の関係をつくる】、【地域の集まりや輪へ引き込む】、【さりげない日々の安否確認を行う】、【助けが必要な人の存在を知らせる】、【生活の中で互いに知り合う仕掛けをする】、【近隣単位の小さな見守りのシステムをつくる】、【行政と住民組織が連携し地区組織を活かす】、【地域住民の信頼感やつながりを育む】が抽出された。

本研究を実施するにあたり、調査にご協力を賜りました A 市 B 区 C 地区の住民組織ならびに保健福祉行政職の皆様方に厚く御礼申し上げます。

本研究は、平成21年度横浜市立大学大学院医学研究科地域看護学教室における受託研究（研究代表者：田高悦子）の一部として行われたものである。

（受付 2010.12.21）
（採用 2011.11.11）

文 献

- 1) 厚生統計協会. 厚生 の 指 標 国民衛生の動向. 2010; 57(9): 39-40.
- 2) 国土交通省. 首都圏整備に関する年次報告書. 2008; 2-3.
- 3) 内閣府. 世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査. 2005; 59-62.
- 4) 和久井君江, 田高悦子, 真田弘美, 他. 大都市部独居高齢者の抑うつとその関連要因. 日本地域看護学会誌 2007; 9(2): 32-36.
- 5) 松澤明美, 田宮菜奈子, 山本秀樹, 他. 法医剖検例からみた高齢者死亡の実態と背景要因: いわゆる孤独死対策のために. 厚生 の 指 標 2009; 56(2): 1-7.
- 6) 厚生労働省. 高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議(「孤立死」ゼロを目指して)-報告書-. 2008; 1-56.
- 7) 河野あゆみ, 田高悦子, 岡本双美子, 他. 大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析. 日本公衆衛生雑誌 2009; 56(9): 662-673.
- 8) 村嶋幸代. 地域包括支援センターに共通の特色とその概要. 全国保健センター連合会, 編. 先進地域に学ぶ地域包括支援センター活動事例集. 東京: 中央法規出版, 2008; 22-27.
- 9) 渡辺浩一, 浦田洋子, 尾久聖子, 他. 孤立死防止に向けた見守りネットワークに関する研究(第1報). 第67回日本公衆衛生雑誌抄録集 2008; 55(10): 479.
- 10) 渡辺浩一, 浦田洋子, 尾久聖子, 他. 孤立死防止に向けた見守りネットワークに関する研究: ケアマネージャーとヘルパーの役割. 第68回日本公衆衛生雑誌抄録集 2009; 56(10): 463.
- 11) Helliwell JF, Putnam RD. The social context of well-being. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Science* 2004; 359(1449): 1435-1446.
- 12) Sugisawa H, Liang J, Liu X. Social networks, social support, and mortality among older people in Japan. *Journal of Gerontology* 1994; 49(1): 3-13.
- 13) Heritage Z, Wilkinson RG, Grimaud O, et al. Impact of social ties on self reported health in France: is everyone affected equally? *BMC Public Health* 2008; 8: 243.
- 14) House JS, Landis KR, Umberson D. Social relationships and health. *Science* 1988; 241(4865): 540-545.
- 15) 榊田聖子, 大井美紀, 川井太加子, 他. A市における地域住民を主体とした地域見守りネットワーク活動の現状: 地域別比較を通して. 甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 2009; 3号: 111-120.
- 16) 榊田聖子, 大井美紀, 臼井キミカ, 他. 地域特性別及び見守り専門職の有無別にみた高齢者の見守りネットワークの現状. 甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 2010; 4号: 231-245.
- 17) 横浜市都市経営局. 横浜市統計ポータルサイト. <http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/ward/minami.html> (2011年12月5日アクセス可能)
- 18) 安梅勅江. ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法: 科学的根拠に基づく質的研究法の展開. 東京: 医歯薬出版, 2003.
- 19) 渡辺美鈴, 渡辺丈真, 松浦尊磨, 他. 生活機能の自立した高齢者における閉じこもり発生の予測因子. *日本老年医学会雑誌* 2007; 44(2): 238-246.
- 20) 工藤禎子. 転入高齢者に対する民生委員の関わりの実際と支援のあり方. 北海道医療大学看護福祉学部紀要 2005; 12号: 53-60.
- 21) Kawachi I, Kennedy BP, Glass R. Social capital and self-rated health: a contextual analysis. *American Journal of Public Health* 1999; 89(8): 1187-1193.
- 22) Anderson D, Guthrie T, Schirle R. A nursing model of community organization for change. *Public Health Nursing* 2004; 19(1): 40-46.

Study on dilemma and strategy of community support network by community organization for prevention of isolated death in an urban area

Yuzuri MASUDA*, Etsuko TADAKA*, Yuka DAI*, Waka ITOI* Rie TAGUCHI* and Chie KAWAHARA*

Key words : community, community based activity, elderly, network, community supportive network, isolated death

Objectives Isolated death of elderly is recognized as a severe social problem in public health and it is an urgent requirement that a supportive community network be organized so that its occurrence is minimized. The purpose of this research was to analyze actual issues of a supportive community network for elderly within the community and to obtain clues for useful actions to prevent isolated death of elderly individuals in the future.

Methods The subjects were 14 representatives of a supportive community network for elderly in A City, B Ward and C District (as a junior high school segment). The research was conducted with a qualitative inductively approach using the Focus Group Interview (FGI). Interviews were focused on difficulties and perspectives within their daily support activities in the community, and were held three times during October 2009 to March 2010. The FGI records were then analyzed with meaningful minimal words and sentences, categorized codes, and then those codes were classified into subcategories or categories.

Results Three categories, Individual, Neighborhood and Community network for elderly resulted from the analysis. Regarding difficulties, “Refusing supports or indifference”, “Isolation or Tojikomori in the youth generation”, “Lack of family support”, “Relationships among their residents weakening gradually”, “Unfamiliar newcomers and residents”, “Residence feels burden on association with neighborhood”, “Limitation of support activities under personal security”, “Lack of resources for persons and places of gathering” were identified. On the other hand, perspectives in the community network for elderly were “Building relationships personally”, “Invitation to community meetings as companions”, “Development of safety confirmation”, “Helping each other in the neighborhood”, “Stimulate enforcement of bonding in daily life”, “Making arrangements for regional administration and residents for supportive activities”, “Fostering the trust and connection of residence”.

Conclusion To further promotion and effective activities for community network for elderly by community residents, it is necessary that information be exchanged among resident organizations regarding their activities in achievement of social cooperation.

* Dept. of Community Health Nursing, Graduate School of Medicine, Yokohama City University